

2018 年度ドコモ市民活動団体助成事業調査報告書

《活動タイトル：貧困の中で生きる子どもたちに多様な学びの機会を》

特定非営利活動法人ビーンズふくしま

山下 仁子

【成果測定対象事業】

《事業1》

事業名： 子どもの貧困対策支援事業

受益者： 生活困窮家庭の子ども

活動目標：生活困窮世帯からの自立を目的に、集合型活動を2ヶ月に1回程度実施。

成果目標：集合型活動を実施することで子どもたちが他者と関わり、多様な学びの経験となる。参加者のうち5名以上が、集合型活動を通して自己肯定感の醸成が図れ、自立心が育まれる。

《事業2》

事業名： 地域孤立改善事業

受益者： 各市町村担当窓口、子ども支援団体

活動目標：子どもに必要な支援のノウハウの蓄積、社会資源の整備を目的に毎月の情報共有、隔月での研修会等の実施。

成果目標：継続した情報共有やノウハウ本を活用した研修を通し、具体的な支援法の学びとなり、受益者全体（調査対象10市町村）のうち20%（2市町村）が地域に必要な支援のノウハウを理解し、資源整備を強化する。

《事業3》

事業名： アウトリーチャー育成事業

受益者： 各市町村担当窓口、子ども支援団体

活動目標：貧困の中で生きる子どもたちの実状の理解を深めることを目的に隔月1回程度、勉強会、研修会等を実施。

成果目標：勉強会、研修会を通し、貧困対策支援を実施する人材育成につなげ、受益者全体が、貧困対策に必要な支援のノウハウを蓄積し、必要人材としてアウトリーチャーを5名増員する。

《事業1：子どもの貧困対策支援事業》

・事業実施背景・経緯

当法人の子どもの貧困対策支援事業は、2012年から全国のモデル事業の一環で県の委託事業として開始された。当初の事業目的は、子どもが貧困の連鎖から脱するために学力を身につけ、自立へ向かうための「学習支援」という名目で開始された。

しかし、貧困の中で生きる子どもたちの実状は、私たちの想像を遥かに超えていた。家の中が野良犬や野良猫、ネズミの糞で塗れている、金銭管理が出来ずライフラインが止まったままである、生命を維持するために十分な栄養素を食事から摂取することが出来ない等、非情に劣悪な環境の中で生きている。

そして、保護者の発達障がいや知的障がい、精神疾患、薬物依存、自殺企図、心中企図を繰り返す等、家庭の背景も複雑である。

このように、継続された貧困故に劣悪で複雑な家庭環境、背景の中で生きる子どもたちは、自分たちの置かれた環境に違和感を持たず、困り感もなく日々過ごしている。

このような環境で生きる子どもたちの多くは、不登校、ひきこもり、素行不良、自傷・他害、乱れた性行動・性感染症、保護者やその交際相手からの暴力、虐待（性虐待を含む）不衛生な生活環境からくる感染症、重篤な病気に気づかず生命の危機にさらされる等、経済的な困窮という側面だけでは捉えきれない壮絶な問題を抱えている。

これらの問題は、確実に子どもたちの「生きる力」を低下させている。

私たちは、子どもたちの「生きる力」を以下に定義付けている。

- ・自分の実状に向き合い、困りごとを認識できる力
- ・周りに助けを求めることのできる力
- ・危険を回避する能力やすべを身に付け、困難な出来事に立ち向かうことが出来る力
- ・自分を信じ、将来に希望を持って生きることが出来る力

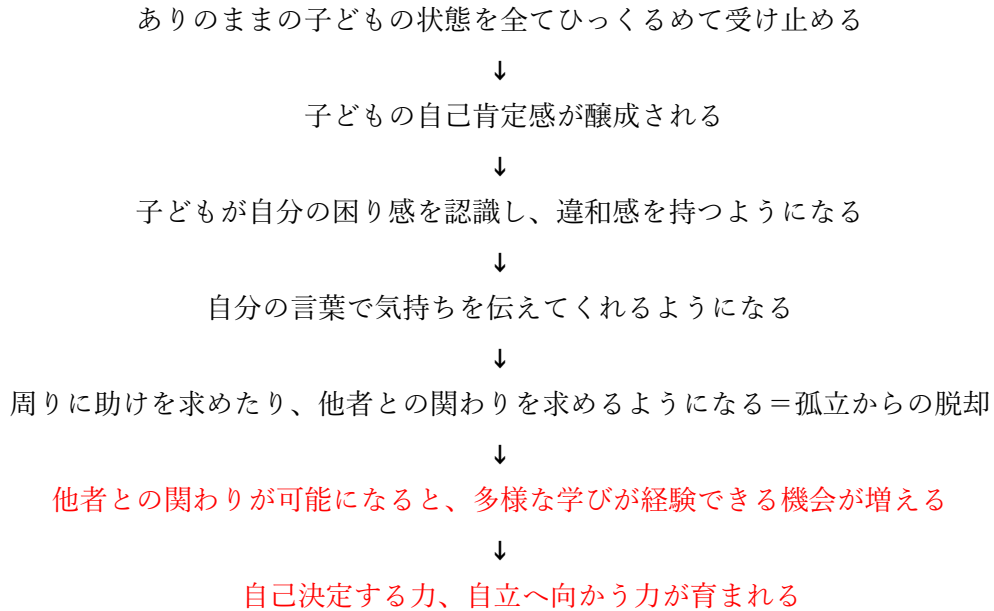
しかし、前述したとおり、保護者の家庭教育力が脆弱な環境では、子どもたちの多くが「生きる力」を身に付けていくことは非常に困難である。そこで、私たちは、全国のモデル事業として開始した子どもの貧困対策支援事業を学習支援の側面に留まらず、家庭支援全般、子どもの健全育成支援全般と変更し、子どもたちが自らの手で自立へ向かう力をつけるための取り組みとして、自己肯定感の醸成、自立心の育成を強化した支援プログラムを確立してきた。

子どもたちが、自分の人生を自己決定し、自立していくためには、第一に自己肯定感の醸成が重要である。私たちは継続した子どもたちへの直接的な関わりから、自己肯定感醸成のプロセスを導いた。（自己肯定感の提唱第一人者：臨床心理学者 高垣忠一郎氏講評。）

以下に示した、自己肯定感醸成のためのプロセスの機会を丁寧に子どもたちに提供した結果、子どもたちは確実に自己肯定感が醸成され、「生きる力」を備え、自己決定力が身につき、自立へと向かっている。

以下が、自己肯定感醸成のプロセスである。

自己肯定感の醸成に向けたプロセス



貧困の連鎖を断ち切る力につながる

これらのプロセスから、子どもたちが多様な学びの経験を重ねるには、自己肯定感の醸成が重要であり、多様な学びの中から、自己決定する力、自立へ向かう力が育まれることを実証した。

子どもの貧困対策支援に必要な支援とは、子どもが生きていくために何かを準備すること、何かを与えることではなく、子どもの力を育むための支援である。そしてそれらの目標達成のためには、子どもたちの交流、その中から様々な経験を積み、自立へ向かっていくための取り組みが必要である。

子どもたちの自立へ向かう力を育むための支援策として、私たちは、集合型活動を継続して実施していくことの有効性を確保し続けるため、集合型活動の計画立案、運営に取り組んでいる。

・調査方法

子どもたちに作成してもらった振り返りシートを参考に、子どもたちへの必要かつ有効な支援法を把握し、参加した子どもたちの様子やフィードバック、ヒアリング内容を参考に、自己肯定感の醸成度、自立心の育成度を定性的に捉える。

・調査期間

2018年9月～2019年8月までの間で、計画管理シートに記載された集合型活動実施終了後にそれぞれ振り返りシートの記載、フィードバック、フォローアップとしてヒアリング等を実施。

・成果測定の信頼性（振り返りシート回収率、ヒアリング実施率、有効回答率）

集合型活動実施時期・内容	振り返りシート回収	ヒアリング実施	実施率
2018、10 宿泊学習	6人回収/6人参加中	6人回収/6人参加中	100%
2018、12 クリスマス会	22人回収/22人参加中	22人回収/22人参加中	100%
2019、1 スポーツ活動	5人回収/5人参加中	5人回収/5人参加中	100%
2019、3 食育学習	7人回収/7人参加中	7人回収/7人参加中	100%
2019、5 集合型学習	4人回収/4人参加中	4人回収/4人参加中	100%
2019、6 食育学習	24人回収/24人参加中	24人回収/24人参加中	100%
2019、7 性教育講座	9人回収/9人参加中	9人回収/9人参加中	100%
2019、8 宿泊学習	11人回収/11人参加中	11人回収/11人参加中	100%

集合型活動実施時期・内容	回収率に伴う有効回答人数	備考	有効回答率
2018、10 宿泊学習	4人有効回答/6人回収中	発達障がい、精神疾患2名	67%
2018、12 クリスマス会	13人有効回答/22人回収中	学齢期外、発達・知的障がい9名	59%
2019、1 スポーツ活動	3人有効回答/5人回収中	学齢期外2名	60%
2019、3 食育学習	3人有効回答/7人回収中	学齢期外、知的障がい4名	43%
2019、5 集合型学習	4人有効回答/4人回収中		100%
2019、6 食育学習	12人有効回答/24人回収中	学齢期外、発達・知的障がい12名	50%
2019、7 性教育講座	6人有効回答/9人回収中	発達障がい・精神疾患3名	67%
2019、8 宿泊学習	9人有効回答/11人回収中	学齢期外2名	82%

集合型活動実施時期・内容	成果測定有効回答内容 (振り返りシート・ヒアリング) ※重複回答は省く	自己肯定感の醸成・自立心の向上が見込めた人数 (参加人数あたり)
2018、10 宿泊学習	<ul style="list-style-type: none"> ・夜の散策をしたのが楽しかった。 ・毎年このメンバーで泊まれるのが嬉しい。 ・夜、女子で話をしたのが楽しかった。何となく学校へ行ってみようかな、と思った。 ・みんなバイトしたり学校へ行ったりしていてすごいなと思った。自分も頑張ってみようと思えた。 ・この空間だけが安心して話ができる。 ・何でも話せるスタッフと夜も一緒にいられるのが幸せ。 ・女子同士で話している時、みんなそれぞれ家が大変な状況だと知って自分だけじゃないんだと思えた。 ・〇〇君が最近元気がなくて気になる。 ・もしかしたら〇〇君に傷つけることを言ってしまったかもしれない。謝りたい。 	4名
2018、12 クリスマス会	<ul style="list-style-type: none"> ・家にはサンタも来ないしクリスマスケーキもないからとてもうれしかった。 ・スタッフが私たちを楽しませてくれるために一生懸命ゲームとかやってくれることが嬉しい。 ・集合型活動の時しか会えないみんなに会えることが嬉しい。 ・こんなに楽しめるメンバーは他にいない。 ・いつもお腹がすいているからたくさん食べられてよかった。 ・家でもクリスマス会をやってみようと思った。 ・自由時間の時、〇〇さんと初めて話が出来た。ラインの交換もできた。 	12名

2019、1 スポーツ活動	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい子がケガをしなくてよかった。 ・沢山運動をして久しぶりに楽しかった。 ・〇〇君は小さい子の面倒をよく見ていてすごいな、と思った。 	2名
2019、3 食育学習	<ul style="list-style-type: none"> ・栄養のある食べ物の組み合わせが知れてよかった。 ・家でもお母さんと料理をしてみたい。 ・お米が出来るまでにはすごく時間がかかることが分かった。 ・施設の人が色々ごはんのことを教えてくれて勉強になった。 ・〇〇君が残さずご飯を食べておかわりもしてすごかった。 ・苦手なおかずを〇〇君が食べてくれて優しいと思った。 ・学校の給食の時間はつまらなかったけど、みんなで食べると楽しいということが分かった。 ・家ではいつも一人だからみんなでご飯が食べられてよかった。 ・調理師になっておいしいご飯を作れるようになりたい。 	4名
2019、5 集合型学習	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ高校を目指す別の中学校の人と勉強できてよかった。 ・わからない問題を教えあえてよかった。 ・私がわからない問題を〇〇君がヒントをくれたりして楽しく勉強できた。 ・絶対高校に合格して、高校で〇〇君と会いたいと思った。 	4名
2019、6 食育学習	<ul style="list-style-type: none"> ・ご飯を作ってくれたのに残してしまって悪いなと思った。 ・ご飯の説明をしてくれている時にちゃんと話を聞いてなくて施設の人に怒られた。 ・〇〇ちゃんが食べるのが遅いけど、みんな待っていてあげて優しいと思った。 	16名

	<ul style="list-style-type: none"> ・季節の野菜を食べることの大切さを知った。 ・おかずが多い時、他の人にあげている人がいるのを見て、残すなら食べられる人にあげた方がいいと思った。 ・いつもご飯を作ってくれる人に感謝しようと思った。 	
2019、7 性教育講座	<ul style="list-style-type: none"> ・命は誕生前から十分戦っていることを知って自分を大切にしようと思った。 ・次に生まれてくるときも、この家族に生まれてきて、次はちゃんと親孝行しようと思った。 ・性感染症の怖さを知った。 ・好きな相手と対話しながら性交渉することの大切さを学んだ。 ・生んでくれた親に感謝しようと思う。 ・本当に愛する人が出来た時、その人の子どもを産みたいと思った時のために自分の体を大切にしようと思った。 ・女の人は大変だな、と思う。 ・死にたいと思う気持ちが少し減った。 	5名
2019、8 宿泊学習	<ul style="list-style-type: none"> ・今年もこのメンバーに会えて一緒に泊まれて嬉しい。 ・〇〇ちゃんの体調が悪そうで心配。 ・〇〇ちゃんが一生懸命ご飯の準備をしてくれて見習おうと思った。 ・毎年、泣いたりパニックを起こしてみんなに迷惑をかけるから今年はそうならないように気を付けることが出来た。 ・初めて参加した〇〇君と〇〇ちゃんと遊べて楽しかった。 ・〇〇君が夢だった××になっていて夢をかなえたことがすごいと思った。 ・〇〇君が泣いていてスタッフと話していたのが気になって心配。 ・前までは宿泊学習の後、家に帰りたくな 	6名

	い、学校へ行きたくないと思っていたけど、今はまた明日から頑張ろうと思える。	
--	---------------------------------------	--

・成果

上記、回答内容（各々の活動参加人数あたり複数回答、重複参加あり）、活動中の子どもたちの様子、ヒアリング等を参考に、集合型活動の成果測定に関して、定性的に捉えた。その結果、前述したとおり、自己肯定感が醸成された子どもたちが多様な学びの経験を重ね、多様な学びの中から、自己決定する力、自立へ向かう力が育まれることを実証した。

今回の調査の結果、9名の子どもたちの自己肯定感が醸成され、自立心が育まれたと評価している。

定性的に成果測定し得られた結果としては、集合型活動参加前と後の子どもの様子の変化を把握し、振り返りシート、ヒアリングの結果と併せて、前述した自己肯定感醸成のプロセスを辿り、生きる力を備え、自己決定力が身に付き自立へ向かってそれぞれが社会接続（注1）を果たしたケースを評価対象としている。

（注1）記述の社会接続とは

- ・不登校からの復学等
（集合型活動を通し、勉強を頑張り進学した他者の影響を受け、自分も自立に向けて夢を見つけ、夢をかなえるために復学の必要性を感じた。）
- ・ひきこもり状態からの就労支援開始等
（集合型活動を通し、他者との交流により自分も働いてみたいと思えるようになり、就労支援を受けてみようと思った。）
- ・ひきこもり状態からの就労開始等
（集合型活動を通し、同じような境遇で生活保護から脱却した他者の影響で、自分も働いて生活保護を脱却できると自信を持つことが出来た。）
- ・病院接続等
（集合型活動を通して、自分の精神疾患と向き合い、治療に専念している他者の影響を受け、自分も自殺願望、殺人欲求と向き合い医療にかかることで自分の精神状態をコントロールしたいと思えるようになった。今の自分には医療が必要だと実感できた。）
- ・福祉連携等
（集合型活動を通し、自己肯定感が醸成されたことで、自分を取り巻く環境の劣悪さに違和感を持つようになり、家庭の環境、親の認知の低さを受け入れ、この状態を改善するには、周りのサポートが必要だと気づき、今までは頑なに拒否していた福祉の介入を受け入れられるようになった。）

《事業2：地域孤立改善事業》

・事業実施背景・経緯

事業1の事業実施背景・経過で記述した通り、貧困の中で生きる子どもたちの多くは、生きる力が低下した状態にあり、自己肯定感が醸成され、自立心が育まれることが重要な支援となる。適切な支援が提供できないと、長期にわたり地域から孤立した状態を引き起こす。地域から孤立した子どもたちに対し必要かつ、有効な支援法を発信、普及し、地域で子どもを支えるための資源の整備、拡充を目指し、地域孤立改善事業を実施する。

・調査方法

実施したアンケート調査、ヒアリング結果を参考に、子どもの実状の理解、必要な支援のノウハウの理解度やそれらの波及実態を把握する。

※アンケートとヒアリングに関しては、地域資源の整備・拡充に課題意識を持ち、主に実働部署となり得る市町村窓口を調査対象とした。

・調査期間

2018年9月～2019年8月までの期間、毎月、子どもたちの実状について情報共有、隔月程度で具体的な支援法について研修会等を実施後、アンケート調査と併行しヒアリングを実施。

・成果測定の信頼性（アンケート実施率・回収率、ヒアリング実施率）

情報共有・研修会等実施時期	アンケート実施市町村	アンケート実施率	アンケート回収率	ヒアリング実施市町村	ヒアリング実施率
2018、9	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2018、10	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2018、11	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2018、12	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2019、1	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2019、2	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2019、3	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2019、4	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2019、5	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2019、6	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2019、7	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%
2019、8	10市町村/対象10市町村中	100%	100%	10市町村/対象10市町村中	100%

※アンケート、ヒアリングにおける有効回答率100%

・アンケート内容(A：とてもできている B：まあまあできている C：できていない)

1、毎月のケース共有により、生活困窮家庭の子どもたちの実状を把握することができている。

(2018、9月当初 A：4市町村 B：6市町村)

(2019、8月現在 A：6市町村 B：4市町村)

2、生活困窮家庭の子どもたちに必要な支援法について理解できた。

(2018、9月当初 A：4市町村 B：5市町村 C：1市町村)

(2019、8月現在 A：7市町村 B：3市町村)

3、生活困窮家庭の子どもたちを地域から孤立することを防ぐために、地域資源の整備や資源の拡充の必要性について理解できた。

(2018、9月当初 A：2市町村 B：3市町村 C：5市町村)

(2019、8月現在 A：8市町村 B：2市町村)

4、地域資源の整備や拡充のための課題の分析・整理ができている。

(2018、9月当初 A：2市町村 B：3市町村 C：5市町村)

(2019、8月現在 A：5市町村 B：3市町村 C：2市町村)

5、地域の課題を分析・整理し、地域資源の整備・拡充の強化ができている。

(2018、9月当初 A：0市町村 B：1市町村 C：9市町村)

(2019、8月現在 A：1市町村 B：1市町村 C：8市町村)

6、地域の課題を分析・整理し、地域資源の整備・拡充に向けて動き出すことができている。

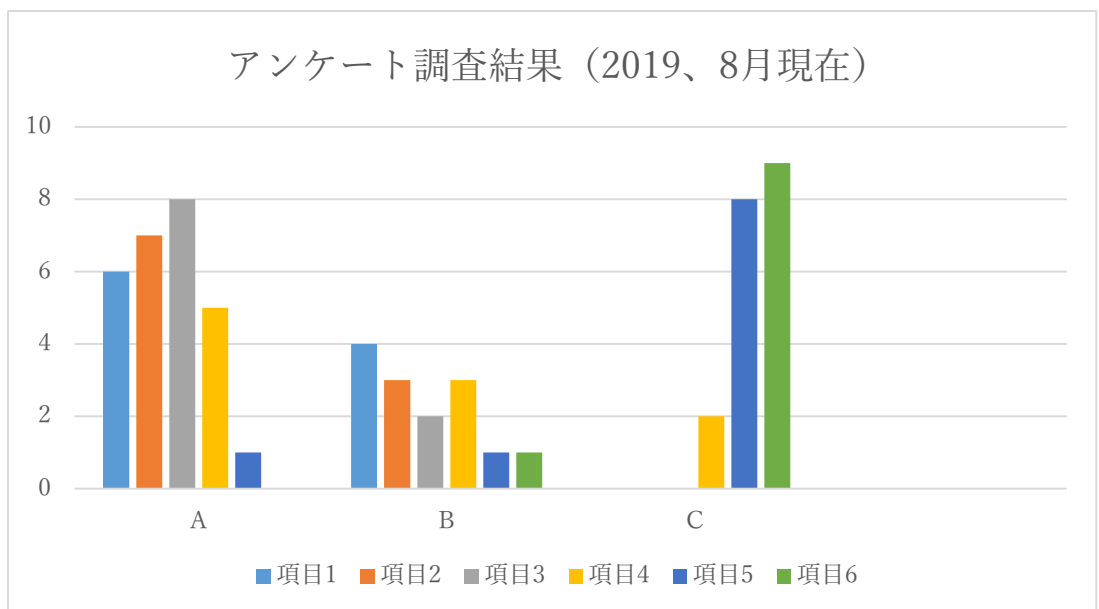
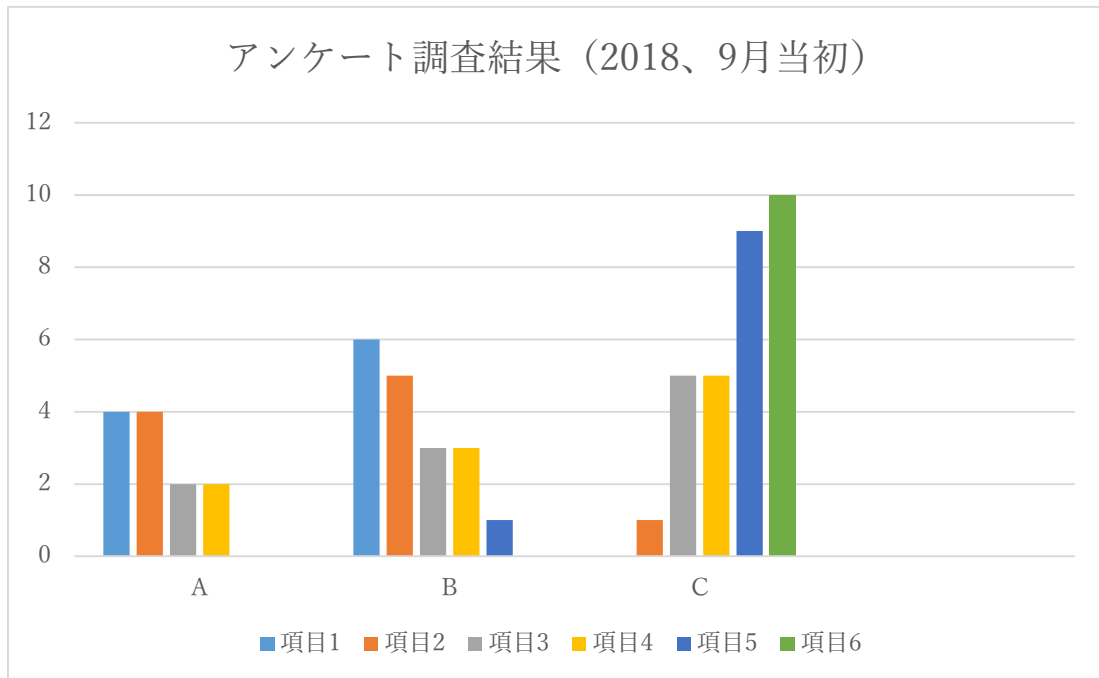
(2018、9月当初 A：0市町村 B：0市町村 C：10市町村)

(2019、8月現在 A：0市町村 B：1市町村 C：9市町村)

※アンケート結果については、年間毎月（12回）実施した結果の開始当初と最終の値を比較値として添付。

項目1～4については情報共有や研修会の開催を重ねる毎にAと回答する市町村が増えたが、項目5、6については然程変動しなかった。

アンケート結果図表



・ヒアリング結果

- ・生活困窮世帯で生活している子どもの実状が想像していたより遥かに壮絶で、支援方針の見直しの必要性を感じている。
- ・生活困窮家庭の子どもに必要な支援として、親支援や家庭生活支援が必要だが、それらの支援を充実させるための資金確保も行政の課題である。
- ・学習支援だけでは解決できない実状を社会全体が理解する必要がある。
- ・自己肯定感を醸成するための取り組みの重要性はよく理解できたが、実際に自分がその動きが出来るかという不安だ。
- ・子どもの支援に必要な資源を整備し、資源の拡充や開発はとても必要だと感じているが、それらを実施するための資金確保が課題である。
- ・子ども支援を適切に実施していくための資源整備として、どこから動き出せばいいのか、具体的に教えてほしい。
- ・子ども支援に必要なノウハウを具体的に蓄積し、地域全体で子ども支援の体制を確立していくために、子ども支援のサポーターとして協働してほしい。
- ・地域資源の整備や拡充に向けて動かなければいけないことは理解しているが、そのための人材確保が追い付かない。

ヒアリングの結果としては、上記回答が複数市町村から出ており、事業2の取組等に対して、必要性等の理解を示している市町村が多数を占めていた。しかし、実働を伴うとなると、各々の市町村で人材や資金面の新たな課題が顕在化し、スムーズな資源整備、拡充には至らなかった。

・成果

年間を通して、毎月実施した情報共有、研修会等のアンケート、ヒアリングの結果等、実働に至った自治体の協働をもとに、今期、子どもたちが地域から孤立することを防ぐ目的として、地域資源整備、拡充に至った市町村は対象10市町村中、1市町村であり、10%の成果であると評価した。具体的には、毎月の情報共有や研修会、ヒアリング等の成果により、自治体主導にて、資金、人材の確保、リソースの開発を経て、子どもサポート事業の展開を果たした。

その他の自治体では、実働には至らなかったが、地域資源の整備、拡充を目指し、地域が抱える課題を整理・分析し、当法人と協働し、地域孤立問題を改善するための手順書の作成に着手する等、資源整備の強化を図ることが出来、実働には至らなかったため、5%の成果であると評価した。総合的に事業2に対しての成果は15%に留まる結果となった。

《事業3：アウトリーチャー育成事業》

・事業実施背景・経緯

事業1の継続的な取組により、自己肯定感が醸成された子どもたちの困りごとの真意を把握し、それらの解決に向けて子どもたちの実状を丁寧に発信し続けることで、地域で子どもたちを見守る体制強化の基盤整備が確立される。

この課程を事業2の中で具体的に地域資源の整備・拡充を目指し、実働をしていくことにより、次の課題として、それらの動きを総合的に担う人材の育成に着目する必要性が顕在化する。

事業1、事業2の取組と併行的にアウトリーチャー育成事業を展開していく目的として、人的資源の強化、増員、育成に結びつけ、子ども支援のミクロからマクロまでを網羅していく。

・調査方法

実施したアンケート調査、振り返り結果を参考に、必要な支援体制、支援形態の理解度や波及実態を把握する。また、アウトリーチャーの設置状況について、各市町村や子ども支援団体の実態を把握する。

※アンケートと振り返りに関しては、既にアウトリーチ支援を実施している子ども支援団体、今後、アウトリーチ支援を展開する予定の子ども支援団体等、アウトリーチャーの増員、育成の専門機関となり得る子ども支援団体を調査対象とした。

・調査期間

2018年9月～2019年8月までの期間、隔月で子どもたちの実状について理解を深め、子ども支援に必要なアウトリーチャーの育成を目的に研修会を実施後、アンケート調査を実施。今期、事業終了時に振り返りを実施。

・成果測定の信頼性（アンケート実施率・回収率、振り返り実施率）

研修会等実施時期	アンケート実施団体	アンケート実施率	アンケート回収率	振り返り実施団体	振り返り実施率
2018、10	1団体/対象1団体内	100%	100%	振り返り実施対象期間外	
2018、12	2団体/対象2団体内	100%	100%	振り返り実施対象期間外	
2019、2	1団体/対象1団体内	100%	100%	振り返り実施対象期間外	
2019、4	1団体/対象1団体内	100%	100%	振り返り実施対象期間外	
2019、6	2団体/対象2団体内	100%	100%	振り返り実施対象期間外	
2019、8	1団体/対象1団体内	100%	100%	8団体/対象8団体内	100%

※アンケートにおける有効回答率100%

・アンケート内容(A：とてもできた B：まあまあできた C：できていない)

1、アウトリーチャー育成研修会により、生活困窮家庭の子どもたちの実状を把握することができた。

(A：6団体 B：2団体)

2、アウトリーチ支援の必要性、有効性について理解できた。

(A：8団体)

3、アウトリーチ支援を実施する上でのノウハウについて理解できた。

(A：5団体 B：3団体)

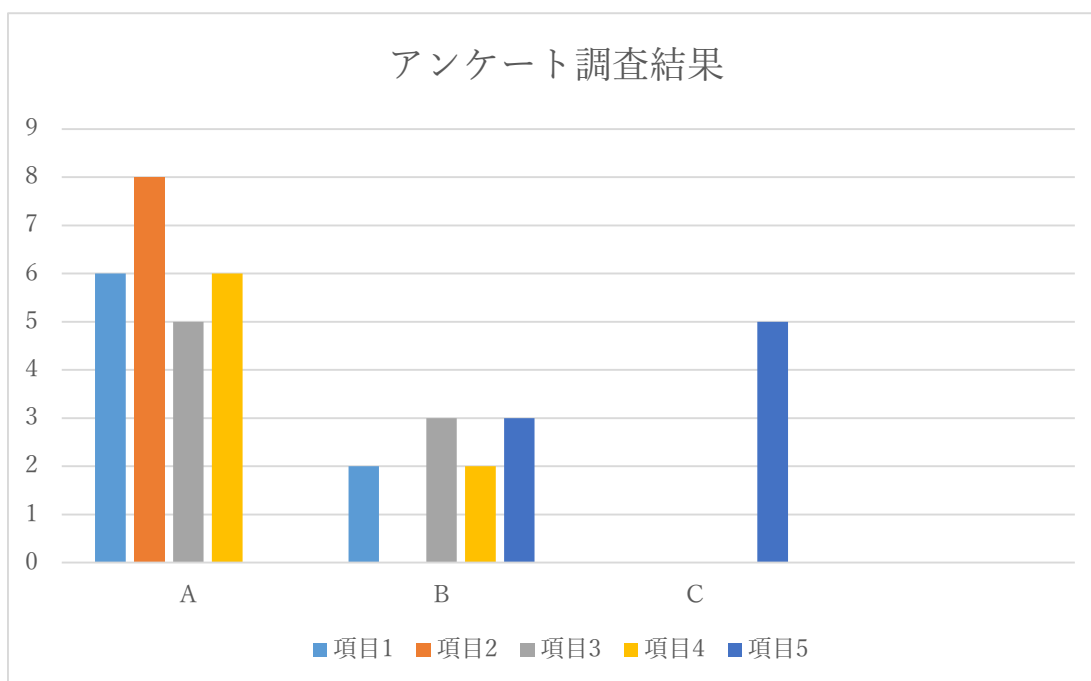
4、アウトリーチャー育成研修会の学びを参考に、アウトリーチャー育成・増員に向けて取り組みを始めている。

(A：6団体 B：2団体)

5、アウトリーチャー育成研修会の学びを参考に、アウトリーチャー育成・増員に向けてのプログラムを実施した結果、アウトリーチャーが育成され、増員された。

(B：3団体 C：5団体 ※各々の支援団体が目標とするアウトリーチャー確保数に到達できたかを評価指標としている。)

アンケート結果図表



・振り返り結果（アウトリーチャー育成研修会参加団体と評議形式で実施）

- ・継続された生活困窮世帯で生活する子どもの多くは、様々な理由により生きる力が低下しており、そういった子どもたちは、居場所に接続できるエネルギーが蓄積されていないため、アウトリーチ支援が非常に有効であることが良く理解できた。
- ・アウトリーチ育成研修会を通して、アウトリーチャーが増えることで、現行で届かなかった丁寧で細やかな支援体制が整備できることを知った。そして、アウトリーチ支援が担う大半が、子どもの自立や、地域の資源整備に大きく役立つことが理解できた。
- ・アウトリーチ支援の具体的手法を学ぶことで、既に現場に出ているアウトリーチャーのスキルアップ研修等の必要性を感じた。
アウトリーチャー育成研修会で学んだ内容が、当法人のアウトリーチ支援チームでの支援では足りていないと感じており、アウトリーチ支援で出来る様々な動き（SW や PS）を今後もフォローアップ研修等を受けながら、身に付けていきたい。
- ・アウトリーチ支援を実施しようとする時、アウトリーチャーが最も不安を訴えるのが、インテークの部分である。アウトリーチャー育成研修会等でのロールプレイ研修等を増やした方が、より現場に即した学びが得られると思う。
- ・アウトリーチ支援の必要性は十分理解できており、既に取組んではいるが、支援の困難さから、継続して関われる人材が増えない。
アウトリーチャーのケアを充分に行う必要がある。
- ・当組織の中で、アウトリーチ支援のノウハウを持っているセクションがなく、アウトリーチを実施しているチームのセクショナリズムが発生している。
- ・アウトリーチ育成研修会参加後、当法人内でアウトリーチの理解を深めるための勉強会等を実施した。その結果、アウトリーチャーの増員につながったが、それでもアウトリーチャーが足りず、1人あたりが負担するケース数も多く、激務故に体調不良で休職を余儀なくされるスタッフもいた。結果としてアウトリーチャーの増員につながらない。
- ・複雑で困難なケースについて、警察や病院、児童相談所等から介入の依頼が多く、そういったケースはアウトリーチ支援実施団体のみでの支援は困難であり、地域連携・協働の必要性について訴えていかなければ適切な支援が提供できない。

振り返り実施結果として、上記回答が各子ども支援団体から出ており、事業3の取組等に対して、必要性等の理解を示している子ども支援団体が大多数を占めていた。

しかし、アウトリーチ支援という手法故に不安や困難さを抱える団体が未だ多く、それぞれの団体が目標とするアウトリーチャー育成・増員への到達は困難を来している。

また、アウトリーチャーのケアや各組織の中でのアウトリーチ支援の確立、地域連携の強化等、新たな課題も顕在化した。

・成果

年間6回実施したアウトリーチャー育成研修会のアンケート結果、振り返りの結果、各子ども支援団体へ適宜実施したフォローアップ研修等をもとに、今期、生活困窮家庭で生活する子どもたちの自立を目的として、具体的にアウトリーチャーの育成を実施した団体は、8団体中、3団体であると評価した。そのうち、アウトリーチャーの増員に至った団体は2団体、各2名ずつの増員であった。残りの1団体は、アウトリーチャー増員に至ったが、他のアウトリーチャーが休職となったため、増員には至らなかった。結果、計4名のアウトリーチャーの増員となり、当初目標の5名増員には至らなかった。

・その他の成果

アウトリーチャーの人員不足は継続した課題である。それらの課題解決を目的に、当該助成事業において、アウトリーチャー育成研修会を実施してきたが、アウトリーチャーの育成、増員の必要性を強く感じている複数の団体から、同内容の課題を寄せられ、それらの課題を繰り返し丁寧に評議した。

その結果、子ども支援に必要な事柄に対し、同内容の課題意識を持ち、それらの解決に向けて実働している複数の団体と共に、子ども支援に必要な支援手法、官民協働、人材育成等について、全国規模で考え、子どもたちを取り巻く社会の整備につなげていくための協議会が発足された。

当該助成事業内での活動事業を起点に、複数の子ども支援団体が協働で協議会を発足できたことは、大きな成果であると評価している。

【総合評価】

今期、当該助成事業を通して、生活困窮世帯で生活している子どもたちの自立を目指し、1、子どもの貧困対策支援事業 2、地域孤立改善事業 3、アウトリーチャー育成事業 上記、3事業を展開した。それぞれの成果としては、目標達成に至らなかった事業もある。しかし、子どもたちは、集合型活動を通し自己肯定感が醸成され、実際に自立に向けて歩き出すことも出来た。地域での孤立問題に焦点を充てた地域孤立改善事業においては、対象地域の多くが、それぞれの課題を認識し、地域資源の整備や拡充に向けて動き出している。また、子どもたちを取り巻く支援の実状として、慢性的なアウトリーチャー人員不足については、他団体との協働に向けて動き出し、人員増員に大きな希望をもつことが出来た。

当法人は、子どもたちの豊かな人生を確保するべく、子どもたちの個別課題から社会課題までに目を向け、ミクロからマクロまでを総合的に網羅するため、子ども支援に必要な対策を連動支援として捉えている。しかし、これらすべてを解決に結びつけるには、単年度のみでの事業展開では到底達成は成しえない。今回の調査にて、新たに顕在化した課題も含め、これらの取組みの成果を確実に次年度へつなげていきたい。